

〔研究論文〕

ガール・ジンからみる第三波フェミニズム
アリソン・ピープマイヤー著『ガール・ジン』を読む

上谷 香陽

〔Article〕

Third Wave Feminism in and through Girl Zines :
On Alison Piepmeier's *Girl Zines : Making Media, Doing Feminism*.

Kayo UETANI

Abstract

This paper considers the relationship between third wave feminism and girl zines through reading Alison Piepmeier's *Girl Zines : Making Media, Doing Feminism*. According to Piepmeier, girl zines and third wave feminism respond to the same world, and girl zines are mechanism in which third wave feminists articulate theory and create community. Following her study, this paper tries to reveal third wave feminism in and through girl zines.

Chapter 1 explains Piepmeier's view on girl's studies and third wave feminism. Chapter 2 locates girl zines within the history of participatory media of US feminism since 19th century. Chapter 3 examines some characteristics of girl zine's visual style and the concept of fragmented identity in order to explain how girl zines are intervening in gendered representation. Chapter 4, based on the concept intersectionality, examines the challenges to "the white-girl ideal of feminism" and the problem of colorblindness by girls and women of color. Chapter 5 offers brief discussion about politics of girl zines.

In so doing this paper explores how girl zines' negotiations of the specific and the generalizable create alternative descriptions of what it means to be an American girl or an American woman.

1 はじめに

本稿は、Alison Piepmeier (2009) *Girl Zines : Making Media, Doing Feminism*. New York University Press⁽¹⁾ の読解をととして、北米における1990年代以降のフェミニズム運動と、ガール・ジンというオルタナティブ・メディアの関係について考察するものである。

ジン(zine)とは、アメリカ合衆国のオルタナティブ・プレス⁽²⁾の長い歴史の中で形作られた、作り手自身が生産し、出版し、流通させる、商業的でも専門的でもなく、小規模で読まれる紙媒体の雑誌(magazine)のことである(Duncombe 1997)。「ガール・ジン(girl zineあるいはgrrrl zine)⁽²⁾」とは、一般的には、若い女性によって制作されたジンの総称であるが、本書では、特に、アメリカ合衆国における1990年代以降の草の根フェミニズム運動と関連するジンのことを指している。ピープマイヤーは、ガール研究(girl's studies)と第三波フェミニズムの学問的議論を主要枠組に、ブック・

カルチャーやアクティビスト・アートや参加型メディア (participatory media) についての学際的な視点を結合させ、「ガール・ジン」をアメリカ合衆国における20世紀末のフェミニズムが展開した場として考察している。

ピープマイヤーは本書を、Mary Celeste Kearney の *Girls Make Media* や Anita Harris の *Future Girl* や Janice Radway の仕事の流れを汲むものとして位置づけている。先行するこれらのガール研究は、主流のメディアにおける少女の描写や、概して少年を主体とし少女を傍観者として位置づけてきた若者文化研究に異を唱え、少女たちを単なる文化の消費者ではなく自ら文化を生み出す者として位置づけている。ピープマイヤーはまた、これらの研究者が、「girl」というアイデンティティの構築を、個人とその社会的文脈が交差するところで混乱して起こる複雑な現象として認識している点にも注目する⁽³⁾ (Piepmeier 2009: 7-8)。

本書のもう一つの主要枠組は、第三波フェミニズムに関わる学問的議論である。ピープマイヤーによれば、「第三波(third wave)」とは、北米における第二波フェミニズム運動の最盛期以降に生まれた世代的・政治的コーホートを緩く定義する用語である。しかし、1990年代以降の北米のフェミニズム運動を「第三波」と呼ぶことに関しては異論もあるという。この用語を使うべきではないとする論者は、若いフェミニストたちは依然として第二波フェミニズムが闘った多くの同じ論点と直面しているのであり、いまだ第二の波の中にいるのだと主張する。第三波という用語は、ありもしない世代間の違いを際立たせるとともに、必ずしも世代とは関連しないフェミニズム内の微妙な考え方の違いを平坦にしてしまうと言うのである (Piepmeier 2009: 8)。また、とりわけ初期の出版物において、第三波フェミニズムという用語は、フェミニズムが終わったことを意味する「ポストフェミニズム」と混同され、誤解を招いたという (Piepmeier 2009: 9)。

ピープマイヤーは、これらの異論を認めながらも、それでもなお「第三波」という用語は有効な概念であると主張する。この概念は、アメリカ合衆国における20世紀末のフェミニズムとその担い手の際立った特徴を明示している。この世代のフェミニストたちにとって、フェミニズムの考え方との最初の出会いは、皮肉なことに、フェミニズムに反対する保守的なバックラッシュを通してであった。彼女たちは、自らのフェミニストの主張をしばしば、「私はフェミニストじゃない、でも…」という言い訳めいたやり方で表現していたのである。また、この世代にとっての女性の権利の名の下の政治的活動は、グローバル資本主義、情報技術、ポスト近代、ポスト植民地主義、環境破壊の世界によって形成され、それに応えるものである。彼女たちはもはや第二波のフェミニストが直面していた世界には住んでいない、と考えられるのである⁽⁴⁾ (Piepmeier 2009: 8-9)。

ピープマイヤーによれば、「ガール・ジン」は、第三波フェミニズムと同じ世界に込められているのみならず、第三波フェミニズムの理論形成の場にもなっている (Piepmeier 2009: 10)。理論とは、通常、エリートによるアカデミックな活動と結びつけて考えられている。そのため、アカデミックではない場所で発展してきたジンにおける理論的貢献—その語彙、概念装置、説明の物語—は、第三波フェミニズムを論じる研究者たちによっても十分には認知されてこなかったという。

フェミニスト理論は、これまで、抽象的なものと具体的なものをめぐる容易ならざる緊張状態の中に存在してきた。理論が一定程度の抽象化を要求する一方で、フェミニストの実践は特定化された物質的な起源と条件への注目を当然にも要求するからである。本書においては、フェミニスト理論に内包されるこの「緊張状態」は、解決したり取り除かれるべきものというよりは、むしろフェミニスト的探究の核心において弁証法を生み出し促進させる非常に有効なものとみなされている⁽⁵⁾。「ガール・ジン」における個別的なこと (the specific) と一般化されうること (the generalizable) の交渉—

一局所的なものとグローバルなものと、個人的なものと政治的なものの間を時に複雑に揺れながら行われる——は、まさに第三波フェミニズムの理論が産出される過程とみなされているのである(Piepmeier 2009:9-10)。

ピープマイヤーは、以上のような枠組に依拠しつつ、「ガール・ジン」のテキストを精読していく。以下本稿では、ピープマイヤーの議論を追いながら、日本ではあまり知られていない第三波フェミニズムと「ガール・ジン」というメディアの関係について理解を深めたいと考える。

2 ガール・ジンとアメリカ合衆国のフェミニズム運動

2-1) ガール・ジンの起源

ピープマイヤーは1章でまず、第三波フェミニズムと「ガール・ジン」を、北米における先行するフェミニズム運動(第一波、第二波フェミニズム)とそこで作られた非公式の出版物の延長線上に位置づけ直す。

「ガール・ジン」は、1970年代以降のアメリカ合衆国におけるパンク文化を一つの起源とする。ジンは、アマチュアリズムやDIY(do it yourself)の精神を重視するパンク文化において、消費主義的な主流文化に対する抵抗のメディアとされてきた。この場合、ジンを作る主体はあくまで男性であるとされ、この抵抗のメディアの創出に女性もまた積極的に関わっていることは見過ごされてきた⁽⁶⁾。パンク文化を起源とみなす「ガール・ジン」研究において、「ガール・ジン」はジン文化の中の例外あるいは断絶と位置づけられてきた。ジンを作る少女や女性たちは、男の子になろうとしている(が、しばしば成功しない)か、男性のパンク・コミュニティに反抗しようとしているにすぎないとされた(Piepmeier 2009:26)。「ガール・ジン」の主題が、パンク・シーンの内部をも含むアメリカ社会の支配的なジェンダー規範への異議申し立てにあることは、長らく注目されてこなかったのである。

ピープマイヤーによれば、「ガール・ジン」の起源をめぐる上記のような見方は、このメディアをとおして展開した第三波フェミニズムの捉え方にも影響を与えている。第三波フェミニズムは、しばしば、第一波・第二波とはつながりのない、アメリカ合衆国のフェミニズム運動における断絶とみなされてきた⁽⁷⁾。これに対してピープマイヤーは、「ガール・ジン」と、19世紀後半から20世紀初めの女性参政権論者や女性クラブのメンバーによって作られたスクラップブック、19世紀末から20世紀初頭の女性の健康に関する小冊子、1960～70年代の女性解放運動における謄写版印刷された出版物とのつながりを指摘する。それによれば、「ガール・ジン」は、消費文化産業によってではなく個人によって制作された、フェミニズムの「参加型メディア(participatory media)」の歴史に位置づけられるのである。

19世紀のスクラップブックは、少女と女性たちに、主流の文化についてコメントし、コミュニティと連帯を構築する空間を提供した(Piepmeier 2009:30)。彼女たちは、スクラップしたマスメディアの情報の横に自らの考えを書き込み、これを閲覧しながら互いにコメントを交わし合った。女性が公的な場で発言する機会が限られていた時代、手作りのスクラップブックは、彼女たちの自己表現とコミュニケーションのメディアとなった。

20世紀初頭には、女性による／女性のための性と健康についての明解な情報を発信する、自費出版の小冊子が作られた(Piepmeier 2009:34)。性と避妊や子どもたちへの性教育を扱ったそれらの小冊子では、主流のメディアでは公表されない率直な経験と情報が伝えられた。生殖器の図解を含

めた情報は、当時のアメリカ合衆国のわいせつ法に抵触するものだったため、既存のメディアにおいては販路を見出すことができなかった。そこで活動家たちは、自分自身の出版物を創出するべく、小冊子を自費で印刷した。それらの冊子は、友人や同僚や活動家仲間たちの手を介して広められていったのである⁽⁸⁾。

アメリカ合衆国の少女や女性たちは、これら非公式の出版物をとおして、あまりに些細なこと、あまりに個人的なこと、あまりに論争的なこととみなされているため、他の場所では言えないことながら語りうる空間を創出してきた(Piepmeier 2009:41)。むろん、この段階ではまだ、作り手や読み手になりうる者は多くはなかった。スクラップブックは、一点ものであり複製されなかったため、限られた人々にしか届かなかった。性と健康についての小冊子は、プロの印刷業者に経費を支払えるだけの経済力を必要とした。これに対して、1960～70年代の女性解放運動(第二波フェミニズム)においては、安価な謄写版印刷の普及がより多くの作り手と読み手を生み出した。女性や少女たちは、運動に欠かせない多種多様な非公式の出版物を何百部も自らの手で複製することができるようになったのである⁽⁹⁾。

2-2) ガール・ジンと第二波フェミニズムの出版物

ピープマイヤーは、第二波の出版物と1990年代の「ガール・ジン」のテキストや図像を比較しながら、両者の表現には驚くほど似通った側面があると指摘する。両者とも、性差別的なイメージとイデオロギーが染み渡っている文化を扱っており、性差別主義に抵抗し女性らしさを異なったやり方で想像する自前のメディアを作り出すことによって、この文化にこたえようとしている(Piepmeier 2009:37)。初期の「ガール・ジン」には、しばしば、1960～1970年代の第二波フェミニズムの出版物の文章が引用、転載された。さらにジンの作り手たちは、第二波の書き物を賞賛し見習って、自分自身の作品を創造していった。この意味で、「ガール・ジン」は明らかに過去のフェミニストの遺産を継いでおり、作り手たちもまた自分自身を後継者としみなしていると、ピープマイヤーは指摘する(Piepmeier 2009:39)。

安価な複製技術——第二波における謄写版印刷、第三波における複写機——の普及によって、女性や少女たちの手作りの出版物はより多くの人の手に届くようになった。第二波のコンシャスネス・レイジング集会や、第三波のライオット・ガールのライブやミーティングの参加者たち全員がこの出版物を受け取った⁽¹⁰⁾。無料あるいは数セントから1ドル程度のこの手作りの出版物は、親密な状況で分かち合われ、少女や女性たちが団結しコミュニティを形成する助けとなったのである(Piepmeier 2009:39)。

他方「ガール・ジン」は、第二波の後のフェミニスト理論からも多大な影響を受けている(Piepmeier 2009:40-41)。たとえば「ガール・ジン」には、1970～80年代のフェミニズムを批判し組み立て直そうとするアメリカ合衆国の第三世界フェミニストたちの考え方——女性の内部にある人種的差異(difference)や不一致を、解決すべき問題や矛盾としてではなく、むしろ活力と社会変動の場として擁護しようとする考え方——との関連が見出せる⁽¹¹⁾。「ガール・ジン」は、「アイデンティティ」という概念の再考を促すこの時期のフェミニスト理論を取り込みながら、前の世代の出版物には見られなかった視覚的、言語的語彙を用い、「フェミニズムを若者固有の言葉で書き直し(Piepmeier 2009:45)」ていくのである。

1990年代の若いフェミニストたちの独特の文体(style)や言語表現(rhetoric)や図像の用い方(iconography)については、本書3章4章において詳細に論じられる。1章ではまず、Riot Grrrlと

Action Girl Newsletter というこの時代を象徴する二つのガール・ジンの分析をとおして、女性らしさ (femininity) という領域内部における遊び心 (playfulness)、矛盾する視覚イメージの使用、非常に激しい怒りと冒涇の表現という3つの特徴が挙げられている。「ガール・ジン」の作り手たちは、前の世代のフェミニストたちが拒絶してきた女性らしさや女性を侮蔑する表現を、パンク文化の激しい怒りの表現などと組み合わせながら別のやり方で利用し、その意味を変革する表現方法を編み出していくのである。

3 ガール・ジンとジェンダーのプレイ (play)

3-1) 分裂された (fragmented) アイデンティティ

第3章では⁽¹²⁾、playをキー概念として、「ガール・ジン」の表現方法が考察される。ジンには、これまでのフェミニストの出版物では避けられたであろう、おなじみの(しばしば見くびられた)女性らしさのアイコンが多用される。しかしそれは、主流メディアが提供するジェンダー規範への迎合というよりは、少女らしさや女性らしさと結びつけられてきた文化的諸カテゴリーを、その意味を揺るがせながら創造的に再結合させようとするフェミニスト批評の試みとみなしうる (Piepmeier 2009:88)。3章では、身体イメージ、少女であることの脆弱性 (girlhood vulnerability)、快楽、母であること (motherhood) を扱ったジンを題材に、アメリカ合衆国の主流メディアが提供するおなじみの女性らしさに対してどんな種類の介入が可能なのかが考察されている。

ピープマイヤーによれば、これまでの「ガール・ジン」研究は、しばしば、少女や女性によるこの文化的生産物に何らかの一貫した堅固なアイデンティティを見出そうとしてきた。ジンの作り手たちは、女性であることと結びついた脆弱性の犠牲者としての経験を語る「危うい子 (at-risk girls)」⁽¹³⁾か、自己表現をとおした個人的成功を表明する「できる子 (can-do girls)」か、といった二項対立的な枠組の中で同定されてきた (Piepmeier 2009:89)。しかしながらこのような枠組では、「ガール・ジン」における「girl」というアイデンティティのあり方を捉え損ねる恐れがあると、ピープマイヤーは指摘する。「ガール・ジン」では、「少女であること (girlhood)」が、分裂され、多様に構築され、融合的なものとして表現されているのである。

「ガール・ジン」においてはしばしば、「アイデンティティ」は故意に分裂されており、分裂を解決する努力は見られず、分裂された「アイデンティティ」構築のメカニズムは明確に可視化されている (Piepmeier 2009:89)。多くのジンでは、「彼女たちは本当は誰なのか」という考え方それ自体が不安定にされ、問われ、拒絶さえされている。「ガール・ジン」は、流動性や矛盾や分裂を獲得し、これらのことがらを解決すべき問題としてではなく創造的エネルギーの源として利用するメディアである (Piepmeier 2009:91)。作り手たちは、女性らしさに関する主流の文化的イメージやイデオロギーや素材を切り刻み、編集し、再利用することをとおして、「本当の女の子」あるいは「理解可能な自己」とされる表象を動揺させていくのである。

3章で取り上げられる「ガール・ジン」は、「fat chick (太った女の子)」や「sexy girl (性的な女の子)」や「welfare mother (生活保護を受ける母親)」などにまつわる一連の神話——良くて「友好的でない (unfriendly)」、悪くて「危険な」——への介入を試みている。ただしそれは、増殖する否定的イメージを和らげるために、「肯定的なロール・モデル」としての一枚岩的な対抗イメージを創出しようというものではない。「ガール・ジン」の介入は、むしろ、馴染みの文化的物語やイメージを不安定にしていくものであり、異なった種類の女性の主体的位置の空間を開くためにそれらの物語やイ

メージの力を借り利用していくものである(Piepmeier 2009:91)。「ガール・ジン」による象徴的領域への介入は、消費文化産業に広がっている理想的な女性らしさに——混乱したやり方ではあるが——挑み、政治的に重要なオルタナティブを提供している、とピープマイヤーは分析する(Piepmeier 2009:93-4)。

3-2) femininity を play する

ピープマイヤーは、「ガール・ジン」の特徴的な表現方法の一つとして、「女の子っぽさ(girlishness)」や「女性らしさ(femininity)」の馴染みの形態を、遊び心を持って(playfully)取り戻し再加工する(rework)というヴィジュアル・スタイルを指摘する(Piepmeier 2009:103)。たとえば、サラ・ダイヤー(Sarah Dyer)の*Action Girl Newsletter*に毎号登場した、「アナキスト・ハロー・キティ」は、1990年代の「ガール・ジン」に遍在するイメージとなった(Piepmeier 2009:103)。テディベアを持った日本でもおなじみのハロー・キティの図像だが、このキティは「Riot Grrrl(当時のアメリカ合衆国における若いフェミニストの代名詞。ライオット・ガール。)」の文字の入ったドレスを身につけており、彼女の持ったテディベアの服にはアナキストのシンボルが描かれている。

このページの中でダイヤーは、「アクション・ガール(あるいはボーイ)になろう。他の人たちが作ったものを読んだり聴いたり見たりするのはすばらしいことだけど、自分でやったら(do it yourself)もっとクール」(Piepmeier 2009:50)と、読者に呼びかける。ここでダイヤーは、大企業主導で生み出される文化を単に受動的に消費するだけでなく、自分たちの文化を自らの手で生み出そうと、読者を励ましている。上記のハロー・キティの図像は、そのような文章と混ぜ合わされているのである。

消費文化産業が生み出す「女の子っぽさ」の典型とも言えるハロー・キティの図像、ライオット・ガールやアナキストのシンボル、「do it yourself」を呼びかける文章という矛盾する並記(juxtaposition)は、本書で注目される「ガール・ジン」の美学の一例である。この美学の中で、女の子っぽいイメージは、ひねりを与えられ、再文脈化され、タフで抵抗的になるようなやり方で意味を変えられているのである(Piepmeier 2009:103)。

第二波フェミニズムの出版物であれば、ハロー・キティの図像の使用は直ちに却下されたであろう。他方、第二波がすでに女性らしさの意味のいくつかを不安定にしていたおかげで、次の世代はそれらを異なるやり方で扱い始めることが可能となった。「ガール・ジン」の作り手たちは、女性らしさに関する多くの文化的人工物は、(とりわけそれが驚くべきやり方で組み合わせられた時には)変更可能な意味を有するものであることを発見した。女性らしさの意味は変化しうるものであり、単純に拒絶されるべきヘゲモニーの実体というより、むしろ熟慮されるべき文化的題材の一部になったのである(Piepmeier 2009:46)。

3-3) femininity を取り戻す

「ガール・ジン」を前の世代のフェミニストの出版物と差異化するもう一つの美学的要素に、女性らしさと「fuck you」的表現を混ぜ合わせる(mash together)表現スタイルがあげられる(Piepmeier 2009:51)。そもそも、「girl」という語自体、第二波フェミニズムが苦勞して退けてきた女性を見下す言葉である。「ガール・ジン」の文章においては、他にも、cunt、bitch、slutなどの女性を侮蔑する言葉や、shit、fuck、hellなどの主として男性が用いるものとされてきた罵りの言葉など、「まっとうな」大人の女性が使用するには不適切とみなされる言葉が多用されている。ジンの作り手たちは、女性の地位を下げるために性差別的な言葉を使用する人々から、これらの言葉のコントロール

を奪い取ろうとする。そして、これらの言葉を別の文脈におき直し、これまでと違ったやり方で作動させようとするのである(Piepmeyer 2009:51-2)。

たとえば、*Bust*は、思いやりや節度や落ち着きや責任を有した無私無欲の番人としての「女性らしさ」と、自分自身の欲望に従って行動することの緊張関係について議論する。女性が快楽を求めればbitchやslutと蔑まれ、「バッド・ガール(bad girl)」のレッテルを張られてしまう。*Bust*はバッド・ガール特集の中で、「bad girlをbadたらしめているのは、単純に、真にun-feminine(女性らしくない)一つのこと——自分の欲望に基づいて行動する——を行っていることだ」(Piepmeyer 2009:105)と述べ、「女性のbadness(不品行、粗野な、品性を欠く)は、それが魅力的である限りにおいて、つまり他の誰かのためになる限りにおいて受容されているようだ」(Piepmeyer 2009:106)と分析する。

*Bust*は、単なる男性の欲望の対象ではなく、自らの欲望の主体としての「バッド・ガール」を肯定的に描き出す。それは、典型的な女性雑誌における「魅力的な」女性ではないにもかかわらず、自らの性的欲望や快楽を堂々とひるむことなく呈示する、挑発的で反抗的で危険でさえある「バッド・ガール」像である。この図像は、自分もそうなりたいたいと読者が容易に同一化できるものではなく、女性らしさと快楽が通常どのように融合しているのかを改めて考えさせる。*Bust*は、主流の雑誌のモデルのように「魅力的」でないとしても、女性は自らの欲望に基づいて行動しうるし、そうすることは楽しいことだと強調する。*Bust*は、フェミニストであることを、楽しくクールなものとして語り直そうとするのである⁽¹⁴⁾。

あるいは、*Grit & Glitter*では、「fuck you」という「バッド・ガール」的言語表現を用いた文章が「グット・ガール」の図像と混ぜ合わせられている。このジンの作り手であるチェスナットとパイン(Chestnut & Pine)は、少女であることや女性であることが危険なアイデンティティとされ、攻撃と被害の場、生来の弱さの所在になっているという事実を理解している。*Grit & Glitter*では、1950年代の中産階級の適切な少女らしさや女性らしさを表現する図像を背景に、激しい罵りの言葉を交えた文体で、性的暴力の被害者としての自らの経験が語られる。

・・・彼らに盗まれた少女らしさや女性らしさを取り戻す。自分が悪いのだと弱気にさせたことに
対してfuck youと言う。私はお茶を飲むし、料理をするし、毎日(every fucking day)スカートをはく。
私はそれを愛する。Fuck you 世界、私はfemme。(Piepmeyer 2009:109)

このテキストにおいては、女性らしさを主張することが、少女であることを脆弱なものにした個人や文化に対する反抗の行為になっている。お茶を飲んだり、料理をしたり、スカートをはくことは、家父長的規範への譲歩ではなく、むしろ攻撃として提示されている。この混ぜ合わせの表現をとおして、チェスナットとパインは、かつて身を守るために拒否してきた女性らしさを取り戻し、反抗と抵抗の表現として利用しているのである(Piepmeyer 2009:111)⁽¹⁵⁾。

3-4) 一人称単数のフェミニズム

「ガール・ジン」が、個人的なこと(personal)を強調することに関しては、今日のフェミニズムの間でも活発な議論が交わされている(Piepmeyer 2009:120)。第三波の書き物は個人的な内省に取りつかれており、もはや「フェミニスト」のラベルに合わないとして、それらを「一人称単数のフェミニズム」と呼ぶ論者もいる。ピープマイヤーは、しかし、「一人称単数のフェミニズム」であることを第三波の破綻とみなす必要はないと主張する(Piepmeyer 2009:121)。

「ガール・ジン」は、女性のunity(結束性、統一性、単一性、一貫性)という考え方に対して懐疑的であり、政策の変更を直接求めるものでもない。こうした意味において第三波は、前の世代の活動家からはしばしば没政治的とみなされてきた。これに対してピープマイヤーは、「ガール・ジン」における局所的で、風変わりで、カテゴリー不能なものの強調は、後期資本主義の均質化の衝動への対抗勢力を提供していると指摘する。たしかに、象徴的領域への挑戦は、それだけでは政治的に十分ではないかもしれない。しかし、権力がこれまでになく公的な言説に結びついている世界においては象徴的領域を形作る能力が真の効力を持つはずだ(Piepmeier 2009:122)と、ピープマイヤーは分析するのである。

4 ガール・ジンと交差的(intersectional)アイデンティティ

4-1) 交差的アイデンティティ

4章では「交差的(intersectional)アイデンティティ」をキー概念に、多文化主義(multiculturalism)や多様性(diversity)を取り巻く構造的な矛盾について論じる「ガール・ジン」が考察されている。

多文化主義と多様性は、現在の北米社会においてはよく知られ広く浸透している考え方である。しかしながら、これらの概念が1960年代に有していたラディカルな政治的パワーは失われ、今日ではもっぱら企業のブランド・アイデンティティやマーケティング戦略に関わる個人化され非政治化された考え方となっている⁽¹⁶⁾。北米の企業文化産業や政治的領域の中にいる多くの人々は、今日の消費文化において人種的多様性が可視化されていることを、自分たちがポスト人種の時代(人種を超越したか、少なくともそれに近づいている時代)に生きていることの証とみなしている(Piepmeier 2009:124)。「多様性」のイメージが消費文化に取り入れられ平坦化、非政治化されることによって、今日においてもなお広く一般に存在する、人種やエスニシティに基づく構造的不平等は見えなくされているのである。

ピープマイヤーは、これをバックラッシュ文化の最も新しい(見せかけの)外観(guise)だと指摘する(Piepmeier 2009:124)。成功のイメージ——マス・メディアにおける可視性としてのエンパワーメント——が、広範囲に及ぶ失敗を覆い隠している。これに対して4章で考察される「ガール・ジン」は、今日においてもなお人々の日々の生活に遍在する、多文化主義や多様性をめぐる構造的な矛盾を改めて浮き彫りにする。主流の言説が人種、エスニシティ、ジェンダーを平坦化するのに対して、「ガール・ジン」は、いかに多様なアイデンティティ・カテゴリーが重なり合い相互に影響し合っているかに注意を向けるのである。

インターセクショナリティ(intersectionality)という概念は、切離し可能で付加可能なものとしてのアイデンティティという考え方を退ける。その代わりに、個人のどんなアイデンティティも多様なアイデンティティ・カテゴリーの交差するところに存在し、アイデンティ・カテゴリーは交差する時に質的に変化する、という見方を提示する(Piepmeier 2009:126)⁽¹⁷⁾。アフリカ系アメリカ人の女性は、アフリカ系アメリカ人の男性とは異なったやり方で人種差別を経験するし、白人の女性とは異なったやり方で性差別を経験するのである。4章で取り上げられる「ガール・ジン」の書き手たちは、自分たちの主観性を形成するより大きな制度や権力構造や歴史に注意を向けながら、人種やエスニシティやジェンダーなど自分の社会的位置の諸側面を力強く政治的にしている。そうすることをおして、彼女たちは、非政治化され市場に駆り立てられている言説に批判的に応答するのである(Piepmeier 2009:124)。

4-2) フェミニズムにおける白人中心主義への挑戦

「ポスト人種の時代」が到来したかのように錯覚させる文化的状況への批判は、主流のフェミニズム内部に存在する、可視化されにくい「白人中心主義」に対しても向けられる。「ガール・ジン」は、交差的アイデンティティという考え方をとおして、フェミニストのシスターフッドや統一性(unity)——「私たちはみな一つ」という比喻——のみせかけを打ち砕き、もっと複雑な個人の主観性や公的アイデンティティの空間を作ろうとしている(Piepmeier 2009:136)。

1990年代ライオット・ガール運動のミーティング⁽¹⁸⁾に参加した有色の少女や女性たちは、対面的でない関わり方——ジンを讀んだり音楽を聴いたりオンラインの議論に参加したりする——をしていた時には感じなかった、白人中心のフェミニズム運動の限界を認識することとなった。ミーティングにおいてジェンダーと性的指向の交差を語ることはとても簡単だったが、人種と階級を加えると面倒なことになった(Piepmeier 2009:134)。 *Evolution of a Race Riot* に寄稿したチャンドラ・レイ(Chandra Ray)は、白人中心のフェミニズム運動におけるシスターフッドとは「あなたがわたしの偏狭さに対抗してこないかぎりには、あなたはわたしの姉妹」というものだとして批判する。

ライオット・ガールや白人の少女や女性たちのジンは、人種差別をしばしば個人間の相互行為において起こる私的で個人的な問題として枠づける。これに対してレイたちは、人種差別を歴史や社会や構造的な不平等として認識することを要求している(Piepmeier 2009:132)。ジンの書き手である有色の少女や女性たちは、「運動にいかにも多様性があるかを示すしるし」として自分が利用されることを拒否する。白人少女や女性たちの語る「シスターフッド」は、差異を平坦化させるだけでなく、より狡猾に人種のヒエラルキーを覆い隠すよう機能する恐れがある。白人少女や女性たちの多様性へのリップサービスは、ある意味で、白人優位を覆い隠すと同時に中心に置くことでそれを支えている、とピープマイヤーは指摘する(Piepmeier 2009:131)。

他方ジンの作り手たちは、「フェミニズムの白人少女の理想」批判が、ライオット・ガール運動自体を否定するものと受け取られないように注意を払っている。たとえばリズ・マクアダムズ(Liz McAdams)は *Evolution of a Race Riot* に、パンク・シーンにおける白人の特権と、人種差別の広まりを無視しようとする白人男女の態度に対する批判を、かれらに宛てた手紙の形で寄稿する(Piepmeier 2009:132-133)。マクアダムズの手紙には手描きのハートや星という「ガール・ジン」で馴染みの図像がちりばめられており、そうすることによって彼女は自分も「ガール・ジン」コミュニティの内部者であることを伝えている。タイプされた怒りの文章に、手描きのハートや星という遊び心のある女の子っぽいイメージを組み合わせる語り方は、彼女の手紙を声明(manifesto)でもあり、友人への本当の手紙でもあるように見せる。

この手紙の視覚的構成によって、マクアダムズは、自分が「有色の怒れる女性」というステレオタイプに還元されることを拒んでいる。彼女は怒ってもいるが恐れてもいる。「そもそも自分の人種について話せるくらい勇敢になれる」ようなサポートを必要としているのだ(Piepmeier 2009:133)。彼女はライオット・ガール運動を否定しようとしているのではなく、それが「白人の世界」以上のものになることを運動の内部者として熱望しているのである。

ピープマイヤーは、有色の少女や女性たちが作る「ガール・ジン」が、「白人フェミニズム」を生産的に批判するという困難な仕事を行っているとして指摘する。北米のフェミニズムにおいて有色の女性たちはしばしば、白人女性のグループが、対立を、深いフェミニスト的介入としてではなく、損害を与え機能的でないものとして解釈しているのを目撃してきた。この文脈をふまえれば、批判的メッセージを薄めることなく書き手を人間らしくしようとする、「ガール・ジン」のアプローチは注目に

値する。4章で取り上げられる「ガール・ジン」の書き手たちは、内部者であり、運動を支持する者であり、批判者でもあると自らを枠付けながら、対立を否定的に捉えるこれまでのフェミニズムの文脈と交渉しているのである(Piepmeier 2009:134)。

ピープマイヤーが強調するのは、こうした批判が第三波の理論と実践の進行中の過程の一部だということである(Piepmeier 2009:135)。ジンの書き手たちは、アカデミズムの中であらかじめフェミニストとしての枠組を与えられている論者にはできないやり方で、フェミニズムとの格闘を行うことができた。4章で取り上げられる「ガール・ジン」の書き手たちは、自分がフェミニストであることは認めながらも、「〇〇フェミニズム」というラベルが貼られることを嫌う。他方、彼女たちは、複合的な抑圧の根絶というインターセクショナルな政治的目標と、人種やジェンダーやセクシュアリティの強調を共有する。彼女たちがこれをフェミニストと呼ぶか否かに関わらず、このことはフェミニストの使命であり、健全な第三波にとって不可欠のものだと、ピープマイヤーは主張するのである(Piepmeier 2009:136)。

4-3) 見えない人種差別(Colorblindness)

フィリピン系アメリカ人のミシェル・ペネロサ(Michelle Peñaloza)はジンの中で、「あなたはどこの出身？」と聞かれた経験について論じている。聞く方にとっては無害で退屈な質問であり、聞く方は自分が単なる好奇心から聞いていると信じている。しかしこれが「日常的な質問」であるという事実は、実際は、質問者がよくある筋書きを再生産していることを示している(Piepmeier 2009:138)。

先の質問にペネロサがナッシュビルだと答えると、質問者は「では両親は？」と問い、彼女はあえて「かれらはデトロイトで出会った」と答える。質問者はざこちな沈黙や当惑や苛立を示す。ペネロサは、繰り返されるこの質問を、外国人(foreign)としての状態と地位を自分が生まれ市民権を持っている場所で生産されることとして説明している。この質問には見えない権力構造が埋め込まれている。「あなたはどこの出身？」と尋ねるずうずうしさと特権を持っていることは、「明らかにあなたはここに属していないが、私は属している」と断言する力を持っていることを意味する(Piepmeier 2009:138)。

ベトナム系アメリカ人のミミ・グエン(Mimi Nguyen)は自分の経験上、「どこの出身？」という質問は「hey baby」のような誘いの言葉として機能していると説明する。*Slander*で、彼女はあるレストランで見知らぬ男性から「どこの出身？」と声をかけられたエピソードについて論じる。「ベトナムだ」と答えると、彼は「おすすめのベトナム人の作家」を尋ね、次に「フランスの作家」を尋ねた。彼女が答えるのを拒否し顔を背けると、彼は「大勢の男がおまえの国のために戦って亡くなったのを知っているか」と怒り出した。この反応に、グエンは「それって、私が生き残った人全員とファックすると思われてるって意味？」と応答する。

このエピソードの直前にグエンは、今日のベトナムが白人アメリカ人のバケーション先として商品化され、非政治的な市場の言説に組み込まれていることについて批判的に論じている。ベトナムの商品化は、アメリカ合衆国の帝国主義の今日的な形であり、ここにはアジア系アメリカ人女性への特定のステレオタイプも含まれている。グエンがかわいらしいエキゾチックなアジア系女性という物語の枠組を拒絶すると、彼女はしばしば怒りや敵意と直面することになる。彼女が経験する抑圧は、人種差別、性差別、ナショナリズムという複数のレベルに同時に作用している。グエンは、「どこの出身？」と声をかけられるという個人的な出会いを歴史化することで、その政治性を浮き彫

りにするのである(Piepmeier 2009:139)。

これらのエピソードは、公民権や反人種主義運動の目標は達せられており、私たちはこれらのことがらについてこれ以上話す必要はないという、ポスト人種主義の根底にある仮定に疑問を投げかける(Piepmeier 2009:136)。ペネロサとグエンに「どこの出身？」と尋ねるのは、白人だけではないという。彼女たちは、「ポスト人種」文化内部の交渉の問題を、白人対その他という図式に還元しない(Piepmeier 2009:140)。彼女たちは「他者化」され続けているが、人種主義の作用を曖昧にするやり方においてであり、「問題の原因は他の何かだ」と見せかけられているのである。

これらの「ガール・ジン」の作り手たちは、ジェンダーや人種についてのステレオタイプが日常生活においてどのように作動しているかを明らかにする。と同時に、この支配的文化のステレオタイプのイメージを、抵抗や戦略的な主観性や交差的アイデンティティ創造のために効果的に利用していくのである。

5 ガール・ジンと政治

以上の議論をふまえ5章では、ジンが行う文化的作業が新しい種類の政治的作業として捉え直される。ジンの行っていることを政治的作業として真剣に取り上げることによって、ジンのみならず第三波の政治について理解する新しい文脈が提示される、とピープマイヤーは主張する。「ガール・ジン」が行っている政治的作業は、ただちに理解できるものではない可能性がある。なぜならばこの作業は、いくつかの理由で、伝統的な政治参加のモデルとは合致しないからである。すなわち「ガール・ジン」は、一般的には、制度的変化のレベルではなく象徴的秩序のレベルで活動するものであり、個人的な表現様式で作動するものであり、大規模な選挙圏というより小規模の身体化されたコミュニティを動員するものなのである(Piepmeier 2009:158)。

「ガール・ジン」の作り手たちがこのような政治参加の様式を発展させてきたのは、彼女たちが生きた時代背景による。1980年代のレーガン時代に始まり9/11以降をとおして拡張していく時代、アメリカ合衆国は深いシニシズムに広く覆われた。この現象は、1960年代から1970年代の社会正義運動へのバックラッシュと、後期資本主義的で新自由主義的な消費指向の文化傾向が合流したことによって、まさにこの時代に出現したのである。「ものごとは実質的には今以上に良くならないし、民間セクター産業が私たちの問題全てを解決してくれるはずであり、正しい商品を買えば私たちはもっと気分が良くなるはずだ」とするものの考え方に、アメリカ合衆国は広く覆われたのである(Piepmeier 2009:159) (19)。

ベル・フックスが「支配の教育(the pedagogy of domination)」と呼ぶこの現象は、人々に、消費者資本主義の世界が私たちの問題を解決するはずだから私たち取るべき行動はないと教える。このようなものの見方が蔓延する中人々は、自分は可能な限り一番よい位置にいるとみなすか、物事は全くうまくいかないかとみなすかの、両極端の見方をするようになる。いずれの見方も無関心やあきらめを生み、変化への努力からの撤退を引き起こしていくのである(Piepmeier 2009:159)。

「ガール・ジン」と第三波フェミニズムが出現し介入しようとしているのは、まさにこのシニシズム文化の世界である。1960年代から70年代の社会正義運動と同等の大規模の社会変動を引き起こす表現とアクティビズムの形式を欲するなら、ジンには失望するだろうとピープ・マイヤーは指摘する(Piepmeier 2009:160)。かつての政治的介入のモデルは、ジンが出現した時代には合っていない可能性があるのだ。

Bitch のリサ・ジャービス (Lisa Jervis) は「1960年代や70年代の抵抗や運動のモデルは、今日はいま行かない。合衆国の選挙システムはひどく破壊されており、自分たちがエネルギーを注ぎたい場所ではない」と語っている (Piepmeier 2009:161)。ピープマイヤーは、必要なのは「何を政治的とするか」の理解を変えることであり、そうすることによって、今何が起きているのかについての見方を曖昧にする伝統的なパラダイムを打ち破ることができる」と主張する (Piepmeier 2009:161)。

ピープマイヤーは、「ガール・ジン」をクレメンシア・ロドリゲス (Clemencia Rodriguez) の言うところの「市民メディア (citizen's media)」として捉える⁽²⁰⁾。ロドリゲスの議論はテレビやラジオ等の電子メディアを念頭においているが、彼女の市民メディアの定義「1 集合体 (collectivity) が、確立されたメディアのあり方 (mediascape) に積極的に介入しそれを変換することによって、シチズンシップを実行に移している、2 これらのメディアが社会的コード、正当化されたアイデンティティ、制度化された社会関係に異議を唱えている、3 これらのコミュニケーション実践によって、それに関わるコミュニティが、上のような変換や変化が可能な地点までエンパワーされる」は「ガール・ジン」にも適用可能である (Piepmeier 2009:163)。

たしかに「ガール・ジン」は、アメリカ合衆国における1960年代や1970年代の社会運動のような大規模な社会変革を引き起こす運動や表現ではない。しかしながらピープマイヤーは、「ガール・ジン」というオルタナティブ・メディアの重要性を、巨大なメディア帝国を作り変えるか否かという点ではなく、日常生活における社会、文化、権力の領域に裂け目を入れる複雑な (subtle) 過程をいかに活性化させるかという点に見出すべきだと主張する (Piepmeier 2009:163)。

「ガール・ジン」のアマチュアリズムや完璧をめざさない表現形式は、読者に、自分にもできるかもしれないと感じさせ、読む者を書く者にする。ピープマイヤーは *Greenzine* を題材に、ジンの政治的介入の様式を *process* という語を用いて記述する。この語の意味は、一つは、ジンは結果よりも手段——ジンそれ自体を作る手段に加えて、共感する読者のネットワークを作る手段——を強調する、という意味である。もう一つは、ジンは作り手に彼女たちになされた暴力を公的に処理 (*process*) する空間を与え、彼女たちの癒しを公的な行為にする、という意味である (Piepmeier 2009:165)。彼女はこれを「プロセスの教育」と呼ぶ。ジンは少女や女性たちの声が公的な世界へと入り込むための、空間と手段と過程を提供するのである (Piepmeier 2009:171)。

ジン (zine) から出発し現在は独立系の雑誌 (magazine) に発展した *Bitch* は、大企業主導のポップ・カルチャーにおける女性表象——それは合衆国において少女や女性であることはどういうことかを規定する——を積極的に批評する方法を提示している。ピープマイヤーはこれを「積極的批評 (active criticism) の教育」と呼ぶ。

Doris の作者シンディー・クラブ (Cindy Crabb) は、人々が「普通は見ない」選択肢や、本当のオルタナティブに魅了されており、これらの選択肢を可視化し人々に希望を教える空間として「ガール・ジン」を捉えている。ピープマイヤーは、*Doris* のようなジンは、諸個人に自分自身の力の感覚を与え、「行けと言われたところにただ行っただけ」にならないよう人々を助けることによって、権力構造を変えられると指摘する。彼女はこれを「想像力の教育」と呼ぶ (Piepmeier 2009:186)。

ピープマイヤーは、ジンが行うこれら三つの作業に、今日のアメリカ合衆国における新しい政治的介入のあり方を見出すのである。

6 おわりに

1990年代初頭は、アメリカ合衆国の若い女性たちにとって、希望とフラストレーションを同時に味わう時代だった。世界はもはや女性を見下しはしないという希望がある一方、それに反する文化が身近に存在するという現実があった。男女平等や多文化主義の考え方が広く普及する一方で、性差別(sexism)、人種差別(racism)、同性愛嫌悪(homophobia)が存続しているという明白な証拠があった。にもかかわらず、大きな社会運動や集合行動はもはや有効とはみなされてはいなかった。強調されるのは市場での個人的成功ばかりであり、フェミニズムとは企業の管理職になることについての思想だと考える若い女性たちもいた。深いシニシズムが無関心やあきらめを生み、変化への努力からの撤退を引き起こした。本書で取り上げられた「ガール・ジン」が出現したのは、このような時代である。

性別や人種や性的指向に関する社会問題は解決済みであり、もはやこれらの問題について話す必要はない、という風潮の中、「ガール・ジン」の作り手たちは、自分たちの日々の生活の中に遍在する構造的矛盾を様々なやり方で表現しようとした。彼女たちは、ステレオタイプの馴染みの物語やイメージを単に拒否するのではなく、むしろそれらの物語やイメージの力を利用しながら、意味を不安定にし、反抗と抵抗の表現に変えていった。ジンの作り手たちが挑んでいたのは、1970年代の第二波フェミニズム以降ずっと問題にされてきた性差別のみならず、今日の主流文化に織り込み済みの平板化された多様性でもあったのだ。

前の世代のフェミニストたちは、性差別とたたかうために組織や機関(institution)作りに力を入れた。ドメスティック・バイオレンスのシェルターや、レイプ危機ホットラインを設立し、NOW(National Organization for Women: 全米女性機構)を組織して月刊誌*Ms.*を発行した。20世紀末の合衆国の若い女性たちにとっても、性的暴力は過去の問題では全くなかった。フェミニスト的考えがポップ・カルチャーや消費文化にまで浸透するに至った20世紀末においても、自分の身に起きたことに名前を付けたり、分析したり、それがシステムの一部であることを理解するやり方を知らず、自らの経験を語ることは容易ではなかった。むしろ非政治化されたフェミニスト的考えが浸透していることによって、性別をめぐる構造的矛盾は不可視化され、「問題の原因は他の何かだ」と見せかけられていたのである。

「ガール・ジン」では、自分の日々の生活における経験が、公的な言説における馴染みの物語の枠組には収まりきれないことの違和感が論じられる。20世紀末のアメリカ合衆国の若いフェミニストたちは、「ガール・ジン」をとおして、制度的レベルというよりは象徴的秩序のレベルに働きかけた。彼女たちが挑んだのは、自分の欲望に基づいて行動する女性が**bad girl**と呼ばれ、思ったことを言う女性、意見を持ちそれを表現することをためらわない女性、煩わされたり攻撃された場合に無関心を装ったり居心地悪そうに微笑んだりしない女性が**bitch**と呼ばれるような女性観であるとともに、性別をめぐる構造的矛盾を無問題化する公的な言説のあり方でもあった。1990年代の若いフェミニストたちがこの時代の「名前のない問題」を語り、問題の所在を共有するためには、公的な言説の領域において問題がいかに不可視化され無問題化されているのか、そのやり方を明らかにすることが必要であった。

作り手たちは、主流メディアが提供する「少女らしさ」や「女性らしさ」に異議を唱えるために、逆にこれらの女性観を再利用ながら、自分たちの違和感が生じるメカニズムを可視化していく。彼女たちは、「少女らしさ」や「女性らしさ」の馴染みのイメージを、それらがもともと置かれていた文脈

から引き離し、遊び心や矛盾や怒りの表現と組み合わせることによって、抵抗の表現に変換していくのである。「ガール・ジン」で行われているのは、主流の文化と全く別の女性観をゼロから創造するというよりは、むしろ、主流の文化における「女性らしさ」の論理を内在的に熟慮した上でその論理を組みかえていく作業である。

「ガール・ジン」の作り手たちは、主流の文化における馴染みの物語やイメージを単に否定するのではなく、それらの意味は変更可能だと示すことをとおして、アメリカ合衆国において girl である、woman であることの別の語り方を開発するのである。彼女たちは、girl あるいは woman であるとはいかなることなのかを、自らの日々の生活の個別具体的な経験の詳細の中から語り直していく。公的な言説が提供する性別や人種や性的指向についての一般化され抽象化された語りの枠組が、いかにして自らの日々の生活における局所的な経験を組織し、girl や woman であることの別の可能性を封印してしまうのかを可視化する。この意味で、第三波フェミニズムのオルタナティブ・メディアとしての「ガール・ジン」は、自らの日々の生活における局所的で個別的な出来事が、脱局所的で一般的な社会の構造といかに接続しているかを考察する、ある種の社会学的な記述を呈示していると考えるのである。

注

- (1) 本稿では基本的に Alison Piepmeier (2009) に依拠しながら、適宜邦訳 (アリソン・ピープマイヤー (野中モモ訳) (2011) 『ガール・ジン: 「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』太田出版) を参照する。
- (2) ピープマイヤーは、本書で取り上げる「ガール・ジン」と1990年代のライオット・ガール (riot grrrl) 運動との関連を示すために、girl zine を“grrrl zine”とも表記している。“grrrl”とは、この運動を牽引したジンの作り手たちが自らを呼ぶために創出した girl の造語である。riot grrrl 運動については上谷 (2011) (2012a) を、「ガール・ジン」については上谷 (2012b) を参照のこと。
- (3) ピープマイヤーが依拠する girl's studies の一つ Mary Celest Kearney の *Girls Make Media* については上谷 (2012b) も参照。
- (4) この主張は Rory Dicker & Alison Piepmeier (2003: 10) からの引用である。
- (5) ピープマイヤーのこの主張は、Carolyn Dever (2004) *Skeptical Feminism: Activist Theory, Activist Practice*, University of Minnesota Press. の議論に依拠している。
- (6) この点については Kearney (2006) や上谷 (2012b) も参照。
- (7) こうした解釈は、第三波の担い手たちが自らのムーブメントを「全く新しいフェミニズム」と主張する際にも用いられた (Piepmeier 2009: 26-27)。
- (8) デネット (Mary Ware Dennett) が1915年に息子たちのために制作した性教育の小冊子は、医者や親や教会の指導者やソーシャル・ワーカーや教師などのあいだに広く広まった。デネットはわいせつ法 (obscenity law) により起訴されたが、この裁判はアメリカ合衆国における「わいせつ」の法的定義の変更に影響を与えた (Piepmeier 2009: 34-35 = ピープマイヤー 2011: 70-71)。
- (9) この意味で、1970年代の第二波フェミニズム運動は謄写版印刷革命であった。
- (10) 第二波のコンシャスネス・レイジング集会と、第三波のライオット・ガールのミーティングの関連については上谷 (2011) も参照。
- (11) 初期の「ガール・ジン」の作り手たちの多くは女性学専攻の学生であり、彼女たちのジンにはしばしば、ベル・フックス、ガヤトリ・スピヴァック、トリン・ミンハなどのアメリカ合衆国に

- おける著名な第三世界フェミニストの学者たちの議論が登場した(Piepmeier 2009:41)。
- (12)紙幅の関係で第2章のまとめを割愛する。2章では、電子メディアが普及した今日においても、紙媒体であるジンが作られ続けていることの意味が考察されている。「ガール・ジン」の物質性——ジンの形態、紙質、文字の形やスタイル(手書きであれタイプであれ)、手書きのイラスト、封筒へのデコレーションなど——は、テキストの内容やテキストを読む経験に多大な影響を与えている。「ガール・ジン」が個人から個人へ直接郵送されてくる手作りの「贈り物」であることは、少女や女性たちが「身体化されたコミュニティ(embodied community)」を形成する上で重要な役割を担っている。
- (13)多くの「ガール・ジン」において、レイプや近親姦や摂食障害などをめぐる自らの経験が議論されていた。この点については上谷(2011)も参照。
- (14)女性にとっての性的欲望を肯定的に議論するスタンスは、雑誌*Sassy*のやり方を踏襲している。雑誌*Sassy*とアメリカ合衆国における1990年代のフェミニズムとの関連については上谷(2012a)を参照。
- (15)ここでピープマイヤーは、チェスナットとパインが、feminineではなくクイアな関係の中の女性的ふるまいと結びつく femm という言葉を使用していることにも注目している。femininity(女性らしさ)が femm として示されることで、女性らしさを異性愛の印として当てにできなくなるとともに、女性らしさが(生得的というより)遂行的(performative)なものであることが示唆されるのである(Piepmeier 2009:111)。
- (16)この点については、Naomi Klein(2002) *No Logo: Taking Aim at the Brand Bullies*, Macmillian. も参照。それによれば、1980年代終わりから1990年代にかけて、急成長をした世界的に有名な多国籍企業は、ものを売ることよりブランドを売ることを重視するマーケティングに力を入れた。スニーカー、衣料品、コーヒー、ハンバーガー、化粧品などを売るそれらの企業は、製品それ自体より、「ブランド」を作り上げることに熱心であった。製造よりもマーケティングへの出費を増やし、若者の生き方や価値観やものの見方や考え方——都市の黒人のティーンエイジャーのスタイルから、大学のフェミニズムや多文化主義に至るまで——を徹底的に調べ上げ、入念に練り上げたブランド・コンセプトを売った。「多文化主義」や「多様性」は消費文化に組み込まれるようになったのである。
- (17)intersectionality という概念についてのこの議論はKimberle Crenshaw(1989)“Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory, and Antiracist Politics” *University of Chicago Legal Forum*, pp.139-169. による。
- (18)ライオットガール運動のミーティングについては、上谷(2011)を参照。
- (19)この議論はbell hooks(1992) *Black Looks : Race and Representation*, South End Press. に依拠している。実際、ジョージ・W・ブッシュ大統領は9/11後、アメリカ人たちに、テロを打ち負かす手段として「買い物に行くこと」を奨励したのだった(Piepmeier 2009:168)。
- (20)Clemencia Rodriguez(2001) *Fissures in the Mediascape : An International Study of Citizens' Media*, Hampton.

文献

Dicker, R. & Piepmeier, A. (2003) *Catching a Wave : Reclaiming Feminism for the 21st Century*, Hanover and London.

Duncombe, S. (1997) *Notes from Underground*, verso.

Harris, A. (2004) *Future Girl: Young Women in the Twenty-First Century*, Routledge.

Kearney, M.C. (2006) *Girls Make Media*, Routledge.

Piepmeyer, A. (2009) *Girl Zines: Making Media, Doing Feminism*. New York University Press.

上谷香陽(2011)「「ガール(girl)」概念の再構築——北米における“Riot Grrrl”運動を事例として——」
武蔵大学総合研究所紀要 no.20、pp.85-99. 武蔵大学総合研究所。

——(2012a)「フェミニズムとガール・カルチャー(Girl Culture)——雑誌 *Sassy* の語り方——」
応用社会学研究 no54、pp.185-199. 立教大学社会学部。

——(2012b)「フェミニズムのオルタナティブ・メディアとしてのガール・ジン(girl zines)
——アメリカ合衆国における少女たちの文化創出活動の系譜——」文教大学国際学部紀要、第23
巻第1号、pp.1-14. 文教大学国際学部。